

岩手医科大学歯学会第27回例会抄録

日時：平成元年2月25日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階第4講義室

演題1. ELISAによるB,C,G群溶血レンサ球菌に対する抗体測定

○田近志保子, 本田 寿子, 佐々木 実,
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

慢性疾患児・虚弱児収容施設の小・中学生を対象にELISAにより、B群、G群溶血レンサ球菌分離陽性者と陰性者の抗体測定を行い、分離陽性者に、群特異IgG、IgM抗体の上昇を認めこれまで報告してきた。

今回は、C群溶血レンサ球菌を含めて、B,C,G群相互の関係を検討し、その特異性の確認を目的として、ELISAによる抗体測定と、1984年1月から1988年12月までの溶血レンサ球菌の分離状況をあわせて報告する。

(1) 1984年1月から1988年12月までの分離状況をみると、1987年5月から1988年12月までG群の分離率の高い月が続いた。また、年度ごとの分離率を5年間の平均と比較すると、1984年はB群、1985年もB群、1986年はA群、1987年はA群とG群、1988年はG群の分離率が高かった溶血レンサ球菌全体の分離率は14%から20%で平均16.4%であった。

(2) ELISAによる溶血レンサ球菌分離陽性者の抗体測定では、B群溶血レンサ球菌分離陽性者（3名）では、B群に対する特異IgM抗体価は1.024倍から512倍、IgG抗体価は2.048倍から1.024倍、C群溶血レンサ球菌分離陽性者（2名）では、C群に対する特異IgM抗体価は256倍から128倍、IgG抗体価は512倍から256倍そしてG群分離陽性者（10名）では、G群に対する特異IgM抗体価は512倍から64倍、IgG抗体価は1.024倍から128倍であった。B、C、G群いずれの場合も分離した群以外の抗体価はIgM、IgG抗体価共に4倍以下であった。

(3) 少数例ではあるが、継続的分離を行っているなかで、同一人で分離溶血レンサ球菌の群が変わった例でも、抗体価の推移をみると、分離した菌の群特

異抗体の上昇が確認できた。

以上の結果よりB,C,G群間では交差反応はなく群特異抗体の上昇が確認された。今後さらに症例数を増して検討して行きたい。

演題2. 根管治療用器具の破損状態

—その3、エンジン用Hファイルの観察—

○久保田 稔, 中嶋 和郎, 寺田林太郎

岩手歯科大学歯学部歯科保存学第一講座

器械的な根管の拡大清掃は、安全性や手指感覚を考慮したhandpieceまでも開発されるに至り、一般に広く普及する様相を呈している。

我々は、廃棄されたエンジン用リーマーの、廃棄あるいは破断状態を本学会に報告して¹⁻³⁾来た。今回は、エンジン用Hファイルについて報告する。

〔材料ならびに方法〕臨床に使用し廃棄されたHファイル15本（15号1本、20号6本、25号5本、30号、35号、40号各1本）である。これまでと、同様の方法¹⁻³⁾で観察した。

〔結果ならびに考察〕破断は、15例中の10例、66%に認められ、破断部位は、先端から2～3mmの所にあった。破断例には、フルーツの間隔に延びを認めたが、逆ねじれを示した症例は無かった。SEMで側面を観察すると、リーマーのN型亀裂³⁾に類似した幅の狭い亀裂が全ての破断症例に認められた。発生部位は最も応力を受ける刃の付け根に多く、走行方向は軸に傾きを有していた。先端方向からの観察により、粗糙と平滑な二つの異なる部分が認められた。粗糙な部分には、延性破壊を示すエロンゲートディンプルが、平滑な部分には、疲労破壊を示すストライエーションが所々に観察された。

回転による応力は、刃の付け根に集中する。この部の金属疲労により亀裂が発生する。亀裂が一度発生すると、この部はより応力の集中を受ける。この応力集中部分は、立体的には長軸に約45度の傾きを有するラセン状である。このため亀裂は、軸にある